

森村・川村ゼミ
前期グループ発表論文
ル・コルビュジエ
と
『輝く都市』

国際文化学部・学科
3年 K組
04g1006
小原 章史

<目次>

第1章：はじめに

第2章：ル・コルビュジェと建築

- 1 建築への目覚め
2. 初期の作品と目に見えない変革
3. パリでの活躍と目に見える変化

第3章：近代建築5原則とその効果

第4章：都市計画と「輝く都市」

1. 都市計画の起こり
2. 輝く都市

第5章：終わりに

第1章：はじめに

現在の社会を見渡してみると、当然のように都市が存在している。もちろんそれは全世界中どこにでもと言うわけではなく、21世紀の今でさえそれは点在していると言った方が正しいのかもしれない。だがしかし、それでも大都市と言わずとも、地方都市にすら高層ビルが存在する時代であることは確かで、特にここ日本は他先進諸国と比較してもなんら遜色のない発展を遂げている。この都市化は自然と成立したわけでは決してなく、19世紀に起きた産業革命が発端となっており、世界中がそれに共鳴するかのよう都市計画が進められたのだ。もちろんそれは日本でも同じでことである。そんな中で、スイス出身で主にフランスで活躍していたモダニズム建築家、ル・コルビュジェ(1887～1965)は第一線で建築でも、都市計画の方でも多大な功績を残し、彼抜きには当時の、いや現在の都市すらも語れない状況を作ったのである。モダニズム建築の、そして彼の特徴でもある合理的なもの作りはなぜそうなり、また彼が描いた都市の理想像、そして彼の残した功績はどのようなものだったのかを、都市計画だけでなく初期の建築からも見ていき、考察していきたいと思う。それが、今後の更なる都市化への土台となるのではないのだろうか。ではまず、彼が残した建築と、そのスタイルの推移から見ていきたいと思う。

第2章：ル・コルビュジェの建築

【1. 建築への目覚め】

幼少期のル・コルビュジェ、本名シャルル＝エドゥアール・ジャンヌレ、は時計職人を目指していた。それは彼の出身地であるスイスのショー＝ド＝フォン土地柄が大いに関係していた。この地は時計産業の中心地の一つでもあったからである。そんな彼の作品は、私たちの知る一目で分かるようなものではなく、装飾が目立つアール・ヌーボー様式の中にあっただ。この時代は、工業化、機械化の波という現状と工芸家達のステータスとの均衡をどう見出すかという、イギリスのアーツ・アンド・クラフツ運動以来の問いがあった。時代の流れに逆らうことはできず、この地の時計産業も大量生産の時代に移行していったのである。この動きは彼にとっても意味があった。というのも、この改革の旗手が師でもあるシャルル・レプラトニエだからだ。彼はコルビュジェが時計職人を諦めさせ、画家を目指そうとしていたところを建築家の道へと歩ませたのである。こうして、コルビュジェは建築家の一步を踏み出したのだ。

【2. 初期の作品と目に見えない変革】

まずはル・コルビュジェの初期の作品、そして彼の才能を形成したものを探っていきたいと思う。まず、コルビュジェと言われ連想する建造物といえば、サヴォワ邸という方が大多数であろう。果たして、彼の作品の数々はそのような直線的で、独特な形状ばかりであったのだろうか。否、決してそうではない。彼の作品には2つのタイプがある。まずは、サヴォワ邸に代表される、内容を軽やかに包み込みつつ外に剥き出す作品。そして、初期の作品に多く見られる、大地に密着し、内部を重く閉ざしこむ伝統的な作品である。このようにそこには彼なりの変革があり、考え方も表現の仕方も違っていったのである。そして、この変化は建築だけでなく都市計画にも反映されていることは明白だと考える。

最初の建築物として有名なファレ邸(1907)では、ファサードの一つを施工したが、それは上述したサヴォワ邸のそれとは違いその地方の花や動物、樹木をモチーフにした装飾が目立ったものだった。しかし、この中にも今後へとつながるであろう点は、これらの装飾モチーフを幾何学的に抽象化、単純化しており、ただのアール・ヌーボー的な装飾過多ではなく、よりモダンなものに仕立てていたところである。

また、愛読書であるアンリ・プロヴァンサルの『明日の芸術』は反実証主義的なプラトニズムにより、彼の思想的骨格を形成した。この中の「光と影の戯れ・密と虚の・・・造型のドラマ」という定義と、コルビュジェの述べた定義である「建築とは光の下に集められたヴォリュームの壮麗、正確かつ巧緻な戯れ」がほぼ同じである点でそれがはっきりと分かるだろう。

さらに、初めての国外旅行で訪れたイタリアでも後の作品に影響を与える出来事にあう。それは修道院での生活において切り詰められた材料の経済が要求する厳正さに基づく原型的な空間と、そこでの共同生活が後の機能主義に影響を与えた。このように師であったレプラトニエのもと、着実に変化していたコルビュジェだったが、イタリアの後に訪れたパリで、第二の師と出会うことになり、このパリ訪問が彼に多大な影響を与えることになる。

これまでの師であったレプラトニエは地域主義者であり、そこからの影響でプロヴァンサル的な幾何学的フォルマリズムな作品が多く見受けられた。しかし、第二の師であるペレー兄弟とともに鉄筋コンクリートで建築をするという当時としては笑われるようなことを目指しだし、確実に次へのステップを踏み出したのである。当時としては笑われていたが、彼らの目指すところは間違いではなく、鉄筋コンクリートの構造の軽さ、それに伴うファサードの自由は後のド

ミノシステム、現代建築の5原則の発案につながっていくのである。またこの地を見た鉄骨造に全面ガラスの非耐力壁のファサード、のちのカーテン・ウォール、との出会いもそこにつながっていく。この時期は先ほども書いた通り、イタリア、パリなどに訪れ地元であるスイスにはないものに触れ、多くのものを吸収していた。その後のドイツ訪問による、バウハウスの重鎮たちとの出会いもそうではあるが、やはり東方旅行はその中でも特別であったらと思う。私たちの持っているコルビュジェの建築物のイメージはやはり白い箱のような建物であって、そのような彼独特のスタイルを確立したのがこの旅行であった。地中海沿岸、また西アジアでのその伝統的な白い建物からインスパイアされたのであろう。

後に『オリエントの旅』で、彼はいくつかの教訓を述べている。最初に、コンスタンティノーブルのモスクは「正方形、立方体、球などの量塊を訓練する基本的幾何学」を示していた。第二に、彼が旅中に見た白い簡素な農家は、自然との調和を基にした精神的な正直さを示していた。故に不完全さや視覚的な虚偽は、石炭で白く塗ることによって直ちに露呈する事となる。第三に、これらの虚偽や、基本的に強調された機能を覆い隠したり否定した折衷的様式は、トルコのバザールのような社会的に変質した状況の中で見出されるのである。この状況とは疾患と罪悪を伴い、このような装飾復興主義の平衡状態は一種の経済的、精神的法則として一般化された。故に、コルビュジェは資本主義の強欲な形式がもつ、古典主義以外の全ての歴史的様式を無用なものとして捉えるようになる。第四に、アトス山の修道院に宿泊した時のことだが、修道士たちは消費財または日常生活の対象物に対して、端正な態度を示しており、食べ物や飲み物のような基本的に必要なものの中に見出される喜びは、修道院の食卓の簡素な調和に明らかに現れていたという。最後に、最重要教訓として挙げていたのが、アテネでの出来事である。彼は日が沈みかけている中で見た、石が燃える様な黄色とオレンジ色に変わったパルテノン神殿をみて感動した。そして、パルテノンが「恐るべき機械」に見えたと言うのだ。つまり、その明快さと無情な誠実さにおいて、残酷で恐ろしい完全な自動装置のように思われたのである。それは自動車と航空機を創り出した「想像力と冷たい理性」と同じ精神によって創り出され、これら機械と同じ技術的發展から完全に生み出されたものとして現れたのだ。彼はこのパルテノン神殿に、明晰、正確、厳しい誠実、簡素、完全な機械をつくり出す経済的競争、そして敵意のある世界の中で闘争する人間の条件の悲劇的情景などを意味付けし、表現した。これらの意味は、後に彼が近代運動の中に導入したものであり、また彼自身の建築物において見出されるものであった。このように、多くの経験をつんで彼は放浪の旅を終わらせることとなる。

しかし、帰国した後に手がけたシュオブ邸(1916)では、まだ白い外壁などの特徴は見出すことは出来ず、平らな屋根がこの時初めて彼の作品に出現したことで、鉄筋コンクリートの使用が、後の今後の変革につながりがもてる点ではないだろうかと考える。この時点ではまだそれら考えを実践するところまでは達していなかったのだろう。そうして、彼は活躍の場をパリに移していったのだ。

【3. パリでの活躍と目に見える変化】

コルビュジェがパリに住もうと考えた理由の一つが「ドム・イノ」のような新しい建築方式を基礎にした新しい量産工業を始めるためであった。この「ドム・イノ」方式とは、コンクリートの軸組構造で、これにより建物の平面や立体が構造から自由になるというものである。また、彼は新しいコンクリートの方式を開発しては実際に使用するようになり、彼の代表的な白い箱のようなつくりのはじまりでも知られるシトロアン住宅(1920)ではコンクリートに粗石を加えた方式を採用した。他にも、コンクリート注入方、石綿板によるサンドイッチ・パネル方式などもその他の建物に使用されていた。また、この時期の計画案にはドミノ・システムに基づいた自由なファサード、斜路外部階段の分節、ピロティ、平らな屋根の上に独立的に載せられたペント・ハウスなど今後のモチーフが確実に見え出し、実際彼自身もこの案を「最初の建築への実際の企て」とみなしていた。

冒頭に述べた通り、ル・コルビュジェは本名ジャンヌレである。だがしかし、いつ彼は本名を名乗らず、コルビュジェと言いだしたのだろうか。それは1920年に友人と「エスプリ・ヌーボー」誌を創刊してからである。これは新しい国際的精神を宣言したもので、ページの大部分をコルビュジェと、同じく編集者のオザンファンで書いていた。その中で彼は建築について、それは「何々様式」とは何の関係もないこと、平面が原動力であり、立体や立面もそれによって決定されること、ピラミッド、パルテノン神殿、コロッセウムもすべて角柱、立方体、円筒、球等のプラトニック立体の組み合わせであること、そして、これらの原理を合理的な計算に基づき遂行するのは建築家よりはむしろ技師であると述べている。また、彼の文章のスタイルは繰り返しが多く、時に冗漫で、レトリカルだが、情熱的で、詩的で、予言者的で、無名でありながら圧倒的な印象を与えていた。これがきっかけで彼は注目を浴びることになるのだ。さらに彼は目に言及してもいた。これは以前からも言っていたが、目を開くことにより光を感知し、光の下に集められた建築のあるべき姿が見えると。これを支えるのは新しい精神である。上述のシトロアンではまだその精神や考えと、建築物が一致してはいなかったが、22年にだされたモデルでは、鉄筋コンクリー

トで全面が支えられ、メインフロアがピロティーにより持ち上げられ、浮遊する立法体、浮遊する精神となって現れた。はっきりとした問題提起、それに対する革新的な回答。屋上庭園、横長の窓、空中に浮遊した住宅など、純粹さ、率直さ、誠実さを真っ向から感じさせるものであった。

シトロエンからはじまる彼のパリでの建築物には確固たる前提の中で徐々に変化が生まれていた。その確固たる前提とは、「機械としての住宅」である。以前、東方旅行をした際に訪れたアテネのパルテノン神殿に彼は「恐るべき機械」を感じたと書いた。開かれたものを見る目でこれを見た際、パルテノンは機械同様完璧なまでの姿、機能を持っていたという。そして、それは住宅にもいえることである。彼の設計した白い箱型の住宅は機能主義のシンボルマークとなり、その地位を不動のものとした。もちろんそれは人を機械に住ませるというマイナスイメージが強かったところもある。しかし、それは十分意図していたことであり、その原因はものを見る目が開かれていないだけなのだ。新しい技術としての機械、新しい生活としての住宅、そして新しい精神全てが三位一体になったとき、はじめて機械としての住宅は、新精神、別名エスプリ・ヌーボーを生産する機械となるのである。それはただ単に物理的な住環境を生産するのとは違うのだ。ものを見ない目はその外見を見分ける機能は持っている。しかしそれは、その奥にある本当の姿は見る事が出来ない。逆にものを見る目とはその姿が見える。よって、パルテノンとスポーツカーが同じに見えるとコルビュジェは語る。この目は、新精神そのものであり、またこの精神とは文化と同じなのだ。

1924年に彼は初めてピロティーを出現させた建築物を発表した。それがラ・ロッシュ邸である。もちろんそれは大掛かりなほどの空中での孤立ではないが、その傾向が見え始めた点では重要である。そして、それは1年前に建てたベヌヌス邸から飛躍的に発展している。それまではあくまで窓のみが突出していたのだから。この突出させたり、持ち上げることは内部の存在感を強調する狙いがあった。その意味でも窓単体でなく、巨大な空間が空中で前方に乗り出し、空間自体の自己主張が迫ってくるという進化には目を見張らねばならない。

そんなピロティーも含まれている近代建築5原則が最初に実現されたのが、クック邸(1926)とされている。これは両側を隣家に挟まれた中で「空中の白い箱」を表現しており、ピロティーや水平連続窓が目立ち、五原則の実現だとみなされる。だが、正面の最上部の浮いたような水平板は説明が難しく、隣家のせいでピロティーによる持ち上げられたことへの視覚的効果も薄いなど、単なる「白い箱」というだけでは不十分であり、いまだ完成されたものであるとは言いにくい。

そして、その5年後の1931年、フランス郊外のポワッシーにサヴォワ邸は完

成した。ル・コルビュジェのパリでの初期における白い箱の時代の最終段階としてこれは存在しており、合理主義の集結点でもある。既に述べられている近代建築5原則や、住宅は住むための機械などに示されていた彼の思想、考えがくまなく表現されている。この建築物を進むには、ピロティの支えである細い柱によって持ち上げられた立方体の下の薄暗い外部空間から、車の転回に合わせた曲面で囲われたガラス空間であるロビーへ。そして、ピロティの外部化された内部空間から、平面中央に配されたスロープ、そこから正面の壁から折り返すとテラスからの外光の入る明るい空間に変化し、2階ロビーのテラス側は壁を立て空間を分節する一方で階段の背景部分に大きく開口をとり光の変化と、彫刻的な階段の演出がなされている。居室は光にあふれた三方を窓で囲われた空間で、テラスは壁に囲われ内部化された外部空間となっており、外部スロープは囲まれ感からの開放を感じさせる。そこから屋上庭園へと至る一連の空間移動により濃密な空間の豊かさを体験することができる。この豊かさの背景には平面を原動力とした個々の建築要素の用意周到な配置がある。平面の絶妙なバランス感覚の上に成り立つ場面転回の物語。住宅におけるパブリックゾーンの豊かな創出、スロープと階段の上下の動線前後のたまりのスペースが他方向に外部、内部空間とつながっていることや人を方向転換させる動線を挿入し、そのとき空間の変化を仕掛ける旨さはル・コルビュジェの建築の質を特徴づけているのではないだろうか。このように内部空間と外部空間を見事に相互貫入させているが、これには2つの方法がある。ひとつは内部空間をガラスなどにより視覚的に外部空間と連続して開放させて内部にいながらあたかも外部にいるような視覚的効果を得ようとする「内部空間の外部化」。もう一方はそれとは逆に、外部空間を壁や屋根を設けて囲い、ある限定された領域を作ることにより内部空間のような落ち着いた感覚をつくり出す「外部空間の内部化」。大きくこの二つの方法によって、内部・外部空間を相互貫入させ、特別な広がり感を獲得したり、独特の空間の質を作り出しているのである。

地元ショー＝ド＝フォン、および東方旅行も含めた初期における思考的影響。この影響は見えるかたちで私たちの前には現れることはなかったが、確実に後の作品へとつながっていた。それは、建築物だけでなく都市論にも言えることだろう。そして、パリでの実践。徐々にではあったが、自らが考え、理想とし、納得のいく作品を作っていった。そのアプローチや、斬新な建築物は建築業界だけでなく、当時のモダニズム運動の中心であったといっても過言ではない。この住宅としての機械という考え方、またそれを実現するための近代建築5原則。これらは現在でも通ずるものだろうし、少なからず未だに影響は及んであるだろう。いや、むしろもう意識するところにはなく、常識というかたちで不可視なところに潜んでいる可能性の方が高い。では、文中に何度も出てきた近

代建築5原則だが、それはいったいどのようなもので、またその効果とはいったいどのようなものなのかを次の章で説明したいと思う。

第3章：近代建築5原則とその効果

前章ではル・コルビュジェの前期、中期の建築物を早足で見えていった。その中で、彼の作品の根底と言っても過言でない原則が、近代建築5原則であったのは分かってもらえたと思う。これにより、彼は彼自身によって己の理想とする建築物、はたまた都市すらも実現可能にしたのである。ではそれらはどのようなもので、どのような効果を建築物に与えたのかを順をおって説明していきたいと思う。

彼の作品の特徴の一つに浮き上がった白い箱というものがある。これにより空白ができた一階部分を「ピロティー」という。この地面の開放の理由と言うのは、動き、交通、また植物などの動的なものが地面に確保されるべきものであり、住居や仕事などの静的なものは上階に持って来るべきであると言う、彼の理念からこれは実現したものである。彼はこれにより一階部分を車などが走ることにより交通難の緩和を期待していたらしい。この考えは彼の描く都市計画案にも多く使われていた。事実、彼の作品以外でも見受けることができ、その内の一つが法政大学の55年館である。これにより、一階部分が学生の憩いの場、及び掲示板となっている。また、柱で支えており壁がないため、開放的で広々とした印象を持たせる効果もある。

ピロティーの次は「屋上庭園」である。これは文字通り、屋上に庭を造ることである。これは建物が増える中で本来そこに在るべきはずの地上の面積を取り戻すことが目的であり、平面で作られるコンクリートの屋根に、土を敷き、その上に草を茂らせることで実現した。これは地球温暖化防止が急務な現在の日本でも多くのビルがこれを実践しており、法政大学も例外ではない。また、これは湿った層によって住居が保護されるという、自然の回復以外のメリットもあるのだ。

以前は建築物を建てる際は、壁自体が家々全体を支えていた。よって、内部は必然的に分厚い壁により、自由の利かない空間となっていたのである。しかし、彼は家を支える役割を壁にではなく、柱にしたのであった。よって、前述のピロティーも実現することが可能になり、さらには内部の壁が重要な役割を持たなくなったことにより、「自由な平面」を可能にし、その可動性・空間的造形形の自由を確立したのである。これは現在ならもうどの建築物でも使われている原則である。当たり前のように思われているが、これを始めたのは彼であり、それまでは非常に不自由だったことが伺えるだろう。

そして、この柱で建築物を支えることにより、今度は「横長連続窓」も実現することが出来るようになった。これも、柱のおかげで壁が耐力せずに済み、窓を最大限に拡張することができる。そうすることにより、部屋に取り入れられる日光が増加し、さらには窓から見える緑により室内にそれがあのかのように見え、自然が生活のなかにより一層溶け込む効果もある。

最後に、柱が支えることにより壁がそこまで重要なものではなくなったと、この章では述べてきたが、それにより5原則最後の「自由なファサード」を作ることができるようになった。ファサードとは建築物の正面をさす言葉で、もっとも目に付く場所であり、重要視される場所である。それまでは窓などもあまりなく、分厚い壁により、単調なファサードしか作ることができなかったが、柱のおかげで壁面をガラス張りにし、日光を取り入れることも可能になった。

このように、今現在では当たり前のように思われるこれらの原則も、当時としては画期的であった。そして、それらは長い年月がたっても私たちの生活に息づいている。この考えなくしては近代建築は成り立たなかったといっても過言ではないはずだ。では、次にこれらも使った彼の都市計画案を見ていきたいと思う。

第4章：都市計画と「輝く都市」

【1. 都市計画の起こり】

18世紀にイギリスで起こった産業革命。これが原因で都市と言うものが急速に出現、発展するようになる。産業革命、言い換えると機械主義の蔓延は郊外に住む人々を都心へと向かわせ、人口増加が進んだ。それまでであった仕事を放棄してまで、またはさせられてまで、この機械主義による大量生産の波に呑み込まれるようになったのである。それが急激に進んだことや、労働条件の劣悪、また環境の不衛生、治安の悪化、住環境の悪化などが原因で、都市は問題を多く抱えることとなった。それはイギリスだけでなく、19世紀以降に飛び火したフランスも例外ではなかった。そんな中、コルビュジェはパリにおいてこの状況を目の当たりにしていた。もちろん、パリのみならずブラジルのサンパウロやリオ・デ・ジャネイロの都市計画や、アルゼンチンのブエノス・アイレスの都市計画案も発表していた。それらはどれもが斬新であり、今でもなお新鮮味を帯びてさえいる。それは、都市計画も彼の建造物も同じであるという印象を受けた。事実、彼は「全的建築、全的都市計画」(プレシジョン上。ル・コルビュジェ著)と述べており、彼にとっては、建築も都市計画も根本としては秩序づ

けることが重要視されていたのである。その秩序づけの対象は、機能と物質である。空間に建築物と道路を配する、つまり人間を保護する容器をつくり、そこに行くまでの連結をつくることであるという。では、次に彼が構想した 1935 年の「輝く都市」について見ていきたいと思う。

【2. 輝く都市】

ル・コルビュジェはパリにおいて 1922 年に「300 万住人のための現代都市」や、1925 年に「パリ、ヴォワザン計画」を発表していた。そして「輝く都市」とは 1935 年に彼が提案したパリにおける都市計画案である。これにはいくつかの特徴がある。まず特筆すべき点は、都市が 9 つの平行する帯状の地域に分けられているということであろう。教育のための衛星都市。業務地域。交通地域。ホテルならびに大使館地域。住居地域。緑地域。軽工業地域。倉庫と貨物鉄道地域。重工業地域。これら 9 つがそれぞれにあたる。これらは、住む、働く、遊ぶ、移動するというそれぞれの機能に応じてゾーニングがなされている。これにより、機能的で合理的な都市が形成される。これは人の流れをより簡略化するという思いが込められている。当時の移動手段であった鉄道、及び自動車というものは、それまでの手段であった馬や徒歩と比べても比較にならないほど早くなった。それは一定の時間に移動する量、スピードが莫大であるということであり、それまでの分散した場所から各々が円の中心である都心に移動することはその流れが混乱し、詰まる可能性すら持ちえているのである。よって、それぞれが分散して住むのではなく、同じ区域に住み、同じ区域の業務地域に仕事にいき、休日は、緑地域にいき遊ぶという、同じ流れを作ろうとしたのである。

次は十字型平面の超高層ビル群(摩天楼)の建設である。これは文字通り、都心に高層ビルを建てることだが、それは人口の増加と関係している。産業革命により多くの人口が都市になだれ込んできた。すると、居住地域だけでなく、業務地域などの全てが必然的に拡大せねばいなくなり、密度がうすくなってしまふ。また、一気に大量の人口がなだれ込んできた場合は密度が濃くなってしまふ。それを避けるために、200 メートルの高さをもつ高層ビルを建てるのである。こうすることにより、中心部の利用密度を高め、合理的、経済的にも効果的となり、相互距離は 4 分の 1 にまでなるだろう。

さらに、都心部の高層ビル以外にも人口増加の措置はなされている。それがイムブルビラという入隅型住居の使用である。これはいわば集合住宅で、住宅地域にはこれが多く存在する。そこには屋上庭園やピロティーはあるものの、その他の 5 原則は見受けることはできず、風通しも悪く、住民にとっては住みやすいものではない。

ピロティーだが、これは住居のみならずあらゆる建物にあり。これにより高架になる効果を生み、建物の下を人や自動車を通ることにより、都心特有の交通渋滞の回避および緩和を生むこととなる。そうすることで、より一層前述の9つの地域の利便性が増すのである。また、彼の考えでは「道路は住宅とはなんの関連も持ち合わせません。」(プレシジョン下。ル・コルビュジェ著)なのである。よって、住宅は空中へ持ち上げられ、空間を占める秩序となるのである。

また、この都市計画案はプロダクトデザイン的な形状をしている点も見逃すことができない。実際の計画案を見てもらうと分かるが、上空から俯瞰してみると網の目のような格子状の都市なのである。その理由は彼が建築家であるからだと彼自身が述べている。「建築は直角に支配されているのです。建築の危機は、この堅固で壮大な直角という根拠を離れ、鋭角あるいは鈍角に身を委ねることにあるのです。」(プレシジョン下。ル・コルビュジェ著)と書かれており、彼の根底にある直線、直角が使用されていることは納得であろう。

このように、「輝く都市」とは機能的でありながら、人間的であることを目指した都市であった。というのも、彼自身このパリの中心部に完全なる解決を求めてはならず、多少のゆとりを持たせたのだらう。また、屋上庭園だけでなく街の至る所に緑が見受けられるようになっている。これは彼がどの計画でも提唱することで、現代都市は樹木に覆われるべきと考えていた。これは魂への優しさであり、人間にとっても、また鉄と鉄筋コンクリートによる現代建築にとっても必要な要素なのである。そして、これまでの都市計画案との違いは、問題に対する改良が小規模で部分的なものであったことである。これは繰り返される混乱状態から、都市計画を時代に即した水準に持ってこようという意図があったのだらう。しかし、結果的にはこの案は非難の嵐にあうことになり、実現することはなかった。またこの案以外の都市計画も実行されたものはほとんどなく、斬新な計画というところに落ち着いてしまったようである。だが、はたしてそのまま片付けてしまってよいのだろうか。彼はただ単に実現不可能な夢を語っていただけなのだろうか。きっと、彼から学ぶところはあるはずである。

第5章：終わりに

ル・コルビュジェの「輝く都市」は、都市を一つの芸術作品とみなし、合理的的精神にもとづいて最大限に機能化された幾何学的、抽象的な美しさをもっている。それは、高度に発達した20世紀の工業技術と抽象派の芸術とを都市の形に結晶し、具現化したものである。しかし、「輝く都市」は抽象派の芸術作品としてはすぐれた作品かもしれないが、人間が生活して、人間的交流をもち、人

間的な文化を形成してゆく場ではないように思われる。これが一般的な意見ではないだろうか。しかし考えてみると、緑の真っ只中に立つ高層ビル、集合住宅などは今日ありふれたものになっている。彼の着想が今日において残っており、影響をうけていることは明らかである。なぜなら、この「輝く都市」は今までのこの場所の、今における特定の問題のみを一時的に解決するためだけのものではなく、これから起こるであろう問題にも先見の明をもって、多種多様で複雑な全ての都市問題をわかりやすく単純にして解決するための都市計画だったからである。この問題を浮き彫りにし、そこに新たな考えを注入して解決しようという姿勢は、この都市案だけでなくその他の事柄にも必要な重要なことであり、それを実践していたル・コルビュジェの考えなどは見習う点が多いのではなかろうか。奇抜だが、根底にある問題提起能力は確かである。ただ、それが受け入れられなかったのは、時代の空気と自分の考えをもう少し合わせることせずに、極端な考えを押し付けただけだからである。しかし、このような極端な案を出したことにより、そこから修正しても高度な案が出されたかもしれない。また現代までその解決策が残ったのかもしれない。何度も言うが、彼の優れた点はその問題提起及び、問題解決策をだすその想像力である。きっとこれは現在の日本だけでなく、全世界中の都市に蔓延る諸問題を解決する際にも、彼の斬新な考え方はどこかしらで関係性を持ってくるかもしれない。そして、さらにまだ見えないところから都市を俯瞰し、的確に問題を提起する力は今後も重要になってくるだろうし、それこそが我々にとって大切なのである。

【参考文献】

- ・ ケネス・フランプトン『現代建築史』中村敏男訳 青土社、2003
- ・ 越後島研一『ル・コルビュジェ/創作を支えた九つの原型』彰国社、2002
- ・ 八束はじめ『ル・コルビュジェ』岩波書店、1983
- ・ ル・コルビュジェ『プレシジョン(上)(下)』井田安弘・芝優子共訳 鹿島出版会、1984
- ・ ル・コルビュジェ『三つの人間機構』山口知之訳 鹿島出版会、1983
- ・ ル・コルビュジェ『輝く都市』坂倉準三訳 鹿島研究所出版会、1963